

調査研究終了報告書

研究分野：環境

調査研究名	福岡県における外来水生植物の生育状況と管理対策に関する研究
研究者名（所属） 印：研究代表者	須田隆一、山崎正敏（環境生物課）、真鍋 徹（北九州市立自然史・歴史博物館）、薛孝夫（九州大学農学研究院）
本庁関係部・課	環境部・自然環境課
調査研究期間	平成18年度 - 20年度（3年間）
調査研究種目	1. 行政研究 課題研究 共同研究（共同機関名：北九州市立自然史・歴史博物館、九州大学） 受託研究（委託機関名：） 2. 基礎研究 応用研究 開発研究 3. 重点研究 推奨研究 I S O推進研究
ふくおか新世紀計画 第3次実施計画	柱：快適で潤いのある循環型社会づくり 大項目：地球的視野に立った環境の保全と創造 小項目：豊かな自然環境の保全と再生
福岡県環境総合基本計画 (P20,21) 環境関係のみ	柱：自然環境の保全と創造 テーマ：生物多様性の保全、希少野生生物の保護
キ - ワ - ー - ド	外来種 水生植物 特定外来生物 生育状況 外来種対策
研究の概要	
<p>1) 調査研究の目的及び必要性 外来種問題は、生物多様性の保全にとって最大の脅威として認識されている。特に繁殖力旺盛な外来水生植物の侵入・大繁茂は、在来種の生育を圧迫している。外来生物法に基づく特定外来生物指定種には、県内に分布するオオフサモ、ボタンウキクサなどの水生植物が含まれており、今後の対策が望まれている。そこで、本研究は、特定外来生物指定種及び環境省要注意外来生物選定種となっている外来水生植物を対象に、県内の分布実態を把握するとともに、生育特性及び在来水生植物への影響を把握することを目的とする。あわせて、これらの外来種の管理対策についても検討する。本課題は、本庁自然環境課提案による行政要望に基づき実施する。</p>	
<p>2) 調査研究の概要 分布実態の把握：オオフサモ、ボタンウキクサ、ブラジルチドメグサなどの特定外来生物指定種（7種）及びオオカナダモ、コカナダモ、ハゴロモモなどの要注意外来生物選定種（12種）について、分布実態を現地調査及び既存情報により把握する。 生育特性の把握：対象種の生育特性（成長、開花、結実、越冬形態など）を現地調査により把握する。 防除対策などの検討：対象種の分布実態及び生育特性データに基づき、競合する在来水生植物への影響及び有効な管理対策について検討する。地域住民、NPOなどが実施可能な効果的対策についても提案する。 なお、平成19年6月以降、ブラジルチドメグサの侵入・大繁茂が筑後地域で大きな問題となっており、防除対策が早急に求められているため、上記、については本種について重点的に取り組む。</p>	
<p>3) 調査研究の達成度及び得られた成果（できるだけ数値化してください） 福岡県内には、19種の外来水生植物（特定外来生物7種、要注意外来生物12種）のうち、12種（特定外来生物5種、要注意外来生物7種）が分布していた。ブラジルチドメグサの分布は、主として花宗川と沖端川に挟まれた東西約9km、南北約4kmの範囲内に集中していた。分布域の特徴から、水流による茎切片の分散がこの区域における分布拡大要因の一つと推測された。 ブラジルチドメグサの植被は、夏季の8～9月に減少するが、10～11月以降には回復し、冬季も常緑で幾分増加することが明らかになった。 ブラジルチドメグサを防除する場合、植被が最も減少する秋季に一斉除去を実施し、常緑で目立つ冬季に残された小パッチや茎切片を除去することが最も効果的と考えられた。</p>	
<p>4) 県民の健康の保持又は環境の保全への貢献 ブラジルチドメグサについて、県内の分布実態及び植被の季節変化などが明らかになった。他種についても県内分布の有無などが把握されたので、特定外来生物の防除のための基礎資料となる。</p>	
<p>5) 調査研究結果の独創性、新規性 ブラジルチドメグサの国内分布は、現時点では限られており、これまで生育特性などの知見がほとんどなかった。本研究により、本種は北部九州における夏季の暑さに弱く、冬季の寒さに強い傾向が明らかになった。また、この特性に基づき、植被が最も減少する秋季に一斉除去し、常緑で目立つ冬季に残された小パッチを除去するという効率的な除去方法を提言した。</p>	
<p>6) 成果の活用状況（技術移転・活用の可能性） 平成21年度以降、地域住民、地元市町などが協働して、ブラジルチドメグサの防除の取組が実施される予定である。防除効果の検証及び評価にあたり、継続的モニタリングが不可欠であることから、本研究は、新規調査研究課題「特定外来生物ブラジルチドメグサ及びミズヒマワリの防除に関する研究」（平成21～23年度）として引き継ぐ。</p>	